

十文字学園女子大学人間生活学部紀要第2巻 2004年

不登校から登校へ—生活指導を中心にした多面的アプローチ

The growth from school non-attendance to attendance: Some
methods of arrangements of daily life by mother

岡村佳子

Yoshiko OKAMURA

要 旨

この論文は、「不登校」児（中二男児）の母親面接を通じて、児の変化、発達が見られ、登校が完全ではないが可能になり、自分の判断で高校進学を決めた事例報告である。

不登校児の背景に抱える問題は複雑であるが、生活実践的アプローチ（今、ここでできることからやってみよう）をとることで、まず、母親が変化した。家族は本来自律的なシステムとされており、簡単な助言では変化しないのが一般的である。家族の中心的存在であった母親が自分の身体意識をもち、自らの更年期を意識化することができた。それによって、児も母親と距離をおいた関係をもてるようになり、思春期の自我発達がスムーズになった。

また、この事例報告は基本テーマとして児の思春期と母親の更年期を広い意味での母子分離現象として捉えている。さらに進んで、世代交代といった文化の伝達の側面から不登校を捉えている。母から児への食事指導を中心にした文化（主に食文化）の伝達を実践した。それによって児の自我発達が促進され、結果として不登校が改善された。

I 目 的

今回の事例研究はある総合病院の相談室へ訪れた不登校児をもつ母親の面接をまとめたものである。母親は日常生活でどのように児と接したらよいのか悩んでいるというのが主訴である。相談員は筆者である。

「不登校」児は明確な身体的疾患や経済的問題がないにもかかわらず、学校に登校しないことが問題化している児童・生徒に対して用いられる一般名称とされている。（鴨沢、2003）この事例もそれにあてはまるが、児の背景に抱える問題は複雑である。ここでは母親のみが来談した。母親からの聞き取りや母親の児への生活指導によって好転したケースである。

十文字学園女子大学人間生活学部人間発達心理学科

Department of Human Developmental Psychology, Faculty of Human Life, Jumonji University

ランニングタイトル：不登校から登校へ

キーワード：不登校、思春期、更年期、母子関係、食事

この事例は基本テーマとして児の思春期と母親の更年期を広い意味での母子分離現象として捉えている。さらに進んで、世代交代といった文化的現象の一現象として不登校を捉え、母から児への文化（主に食文化）の伝達を目標にして生活指導を行うように助言したものである。相談の進め方は、月1回、1回につき1時間の面接を行った。母親からの聞き取りを中心にする。相談対象は母親であり、家族システムの改善を目標とした。

II 方法

- (1) 母親が話した内容をまとめ、解釈して伝える。（●は母親、▲は児、■は父親についての話である。）
- (2) 悩みについて質問があった場合、児ならびに家族構成員の発達の観点から助言した。すなわち、袋小路にはいつてしまうことがないように、開かれた道に出るような発達の方向づけを心がけて助言する。
- (3) 現実見当識をわきまえた観点、すなわち今ここで何ができるかを考えて、できることを実践していく生活実践的観点から助言する。
- (4) 母親には毎日食事と基礎体温を中心に記録をとってもらう。（ノート法の実践、図1を参照）

III 結果

16回の面接について、母、児、父の変化を母の聞き取りから再構成してみる。

<一回目>

家族構成と児の生育歴について報告を受ける。

家族構成は父（49歳）母（48歳）と児（一人っ子、男、中学2年生、14歳）の3人である。

●母親は専業主婦である。母乳はよく出たという。授乳は3歳までおこなったという。夜尿はない。児の発達は順調だったという。

▲児の体格は身長が165cm、体重は45kgである。中一の時、震災を経験する。そのあと、家族3人が狭い部屋で、団子のように寝ている。

■父の職業は船員であった。数年前、課長を最後に退職した。職を変えて庭職人になっている。そのころから無口になったと母は言う。

（助言）

- ・母子分離と父子分離のための工夫として部屋の配置を考えてみた。身体的に成熟した男子が自分の独立した居場所が持てるように配慮して、父の部屋から距離的に遠い部屋を児の部屋とした。
- ・母親には日常の暮らしを、自分の身体意識を取り戻すことでみつめなおすように助言した。具体的には体調の良し悪しに気づくこと、家事のやりかたを体調に応じて変えていくこと、児や父との付き合いにも体調によって工夫をこらし、自然で無理のない交渉をもてるようになることを目標にした。

幸せな家族とそれを維持する専業主婦といった文化的、社会的規範から自由になることを目標にして、まず母親自身の身体の変化に気づくことからとりかかった。女性の身体は

出産育児をする時代はそれにみあったホルモン支配を受けている。こういったホルモン変化は身体の深部体温を指標にするとわかりやすい。今回は舌下体温（基礎体温）を測定することで母親自身に訪れている更年期に気づいてもらうことにした。

- ・ 児の自我を育てることを目標にする。その第1歩として、自分の意見や自分の主張を表現できるようにリラックスした家庭環境を作るよう助言した。児の気持ちが一歩ストレートに出てくる場合に親が戸惑うことがあれば、記録して次回の相談に持ってきてもらうことにする。

<二回目>

- 主婦として家族の食事を作る時、だれを1番にイメージして作るかを尋ねた。母は、食卓には父の好物を中心に並べてきたという。
- ▲ 児は最近、5,000円の洋服を欲しがるといふ。また、牛乳をパックのまま飲むという。母がそれを注意しても聞かないでやり続けるという。学校には行ってない。“好きなようにしていいよ”と母に言われ、のんびりしている。母に甘えてくるようになった。不登校の理由を言えるようになる。寝る、遊ぶ、食べるといった生活時間のおおまかな配分ができるようになったという。

(助言)

- ・ 母が作成してきた基礎体温表に、さらに母の体調と機嫌を自己判定して書き込む作業をしてもらう。
- ・ 父のための食卓ではなく、児のための食卓を用意する必要を伝える。その第一歩として、ノート法を実践してもらう。朝食、昼食、夕食のメニューを書き出し、児が喜んで食べたものに◎、普通に食べたものに○、いやいや食べたものに△、食べなかったものに×をつけておくやり方を伝える。(図1を参照)
- ・ 余裕があれば母親自身も児と同様の食事の観察をするように伝える。

<三回目>

- 母から自身の体調のことについて報告をしてもらう。体調は良くなってきたという。他人の言動を信頼できるようになってきたともいう。今まで専念してきた絵を描くこと、染色などをやめているという。基礎体温のグラフをつけていたら自分の体調が解ってきたという。最近、家族や周囲の人達に堂々と自分の体の調子が悪いと言えるようになったという。これまでは自分の身体のリズムは特にいいとも悪いとも思わずにいた。こんなものだと思いこんでいたという。
- ▲ 児は半年ぶりに床屋へ行ったという。自分の部屋で寝るようになってから、ふとんは敷きっぱなしにしているという。最近、自ら進んで、ふとんの周囲を掃除機で掃除をしたという(初めてのことだという)。また、父が頼りないことが解ったという。(家族旅行に出かけた。そこで父が迷子になってしまった事件のことを指している) 児が学校のクラス担任の悪口を言うようになった。(そういう時の表情は目つきがきびしくなっているのに驚いたという)

(助言)

- ・ 思春期は、自己の存在を強調するために、においをつけたくなる時期があることを伝える。

男らしいいいにおいという感覚があることを母に伝える。

- ・ 兄の部屋の掃除は兄に任せること、散髪、入浴などは兄の判断に任せること、子ども扱いして清潔、整頓などを口うるさく言わないことなどを助言する。
- ・ 衣生活に関しても、洋服やパジャマの着替えをうるさく言わないで兄の気づきを待つように伝える。
- ・ 母親の閉経の時期に合わせて兄が身の世話を母親にしてもらうことなく、自立して行えるように組み込んでいきたいと伝える。
- ・ 母は自分の体調を整え、食事を作る。気にいらなければ、兄に自分で自分の気にいった食べ物を作ってもらふ。兄が作れるような食材や環境を準備しておくように助言する。

<四回目>

- 母が自発的に彼女の子育てを振り返って語り始める。比較的束縛の多い環境で子育てをしてきたという。今、基礎体温を上げるための工夫をしているという。

他人の役に立てることが嬉しくて、友人5人に味噌作りを教えてあげたという。

- ▲ 兄が最近、勉強したいと言い出したという。夕方から夜にかけて通っている学習塾を現在の週2日から週4日に増やしたいというので塾の先生に兄が直接頼んで増やしてもらうことになったという。最近、金遣いが荒くなったという。(CD、コントローラ、など計10,000円使った)自分で食事を作るようになったという。(クリームコーンスープ、ヨーグルトなど)友人から学校の話を書くといらつく。

- 父は新築予定の家の設計図を家族3人で考えるようになってきた。(今までは父が1人でやっていた)

- 母に父方家系図について説明してもらう。

(助言)

- ・ 母親に基礎体温の高温を保つ工夫を紹介する。同性の気のあう友人とのおしゃべり、買い物、適度の運動(散歩や水泳など)、温食物を摂取すること、疲れすぎない工夫などを伝える。
- ・ 兄や夫とのけんかを恐れず、やってみよう。男とけんかするのはこわいといった意識がある場合、勇気を出して思ったこと、感じたことを口に出してみようと伝える。
- ・ 衣食住の世話にお金を惜しまない。母親や妻という大義名分から、自分ひとりで家計のやりくりをしていると出費が少なく抑えられるが、家族の一人一人の自由も抑えられてしまうことが多いことを説明する。家族成員3人が自由に衣食住を選び共生できるように経済的に許される範囲で出費を惜しまないことを助言する。

<五回目>

- 母が基礎体温や体調の記録をするだけでなく、日記と家計簿(実母もやっていたという)をつけるようになったという。実母は姉と同居しているが、実母をはさんと姉と妹(自分)との葛藤が表面化してきたという。

- ▲ 兄が最近荒れてきたという。県外の高校へ進学することを決断したという。

- 父も最近荒れてきたという。

(助言)

- ・家族成員3人がストレートに気分を表現できるようになっているので良い傾向だと思うと伝える。自分をまず表現してそのあとで3人が互いに調整することができるようになるだろうと伝える。
- ・今まで児を子ども扱いしてきたが児の意志を尊重して児に従ってみて、その結果で児の成長を確認してみるのもよいだろうと助言する。
- ・母親には、自分が考えたり、思ったりしていることを日記にまとめて書き出してみることをすすめる。

<六回目>

- 母が基礎体温について報告してくれる。36℃以下がなくなってきたという。肩凝りもなくなってきたという。母は決心したという。子どもが自分に向かってきたら逃げないでおこう。逃げ出さないで対面することが大切だと解った。今までは「買い物に行く」とか言って息子と対面することから逃げていたという。実家の姉に対してははっきりものが言えるようになったという。実母が亡くなった。頼る人がいない。しっかりしなくてはと思う。今まで男が恐かったのではないかと思う。結婚生活を振り返るようになる。
- ▲児は学期末の終業式、学期始めの始業式は登校した。自転車で外出していたのが、徒歩で出かけることを好むようになった。友人と旅行にでかけた。一人旅もする。ピストルを欲しがる。母が反対する。母が児をたたく。児が泣いて自分の部屋に入ってしまう。今度は父に頼むと言う。児が時々食事のことで文句をいうと、母が気にいらないうら食べなくていいと叱ると児は泣きだしてしまう。
- 父は、母と息子の関係が安定しているので安心しているように、母には見うけられるという。新しい家には父の居場所をまず作ることになったという。

(助言)

- ・今のまま、恐れず、息子とけんかしよう。けんかを通じて母の考えや文化が伝わっているので息子は実感として母を感じているだろうと伝える。

<七回目>

- 母は、児が自分をにらみつけても児の目の奥にこわさのない顔が見えるので安心だと報告してくれる。母と関係なく、児本人で登校を決めるように告げているという。児が学校に行かない時、対策を考えるのが母の仕事だからといってあげているという。子育てにマニュアルがないことが解ったと母は言う。母は児の昼食を工夫しているという。母は児が2学期には登校しそうに思えるという。
- ▲児は1日だけ登校した。母と対話するようになった。母のように先のことを考えずに僕は進めないと話す。母はおじさん(児が信頼している遠縁の男性)と似たことを言う、母は時々本当のことを言うなどと話す。児は女の子を気にし始めるようすで、外出時に、服装もきれいにして行くという。母に、児が自分の気持ちを説明することができるようになってきたという。

(助言)

- ・母子分離の条件は、友人がいることと、本音が言えることであると説明した。それらの条件がそろってきていることを確認しあう。

<八回目>

- 母は実母の遺産相続を終了したと報告してくれる。

母が食事を作っても兄が食べないので、カップヌードル、冷凍食品を置いているという。対人関係について、今まで母は他人にあわせてきた。今は、はっきりいやだと言えるようになったという。

- ▲兄は健康そうにしていると母はいう。

兄は散歩をよくしている。夜は、一般の塾通いをしているが、兄は不登校の塾は行きたくないという。友人として不登校の塾へ行く人は、兄はいやだと言うという。母にきちんと論理的に言葉で反抗できるようになってきた。中間テストを受けたいと言う。母が学校へ取りにいった、兄がやって、母がまた、学校へ届けたという。兄にクラスの女の子から電話がかかるようになったという。カップヌードルを自分で作って食べるのを喜ぶ。

- 父は新しい家を建てる場所を家族3人で見に行こうという。でそのようにしたという。

父が母に休養するように言ってくれるという。それで母は実家で2泊してくる。

- ▲母、息子で食卓を囲む時は兄が食べないという。父、母、息子で食卓を囲むと兄は食べるという。兄は、父と一緒にジャズを聞く。そこへ母が入ると怒る。夜、父がいないと母の肩をもんでくれる。

(助言)

- ・夫や子どもが働いているのを見守る余裕をもつ必要性を伝える。
- ・兄が母と距離をとろうとセルフコントロールしていることを説明する。
- ・母の今までの生き方や過去をノートに整理してみよう、こどもが自立したあとの母自身の生き方を探ってみようと助言する。

<九回目>

- 母は日記を相談員に読んでもらえるので、きれいに書けるようになったという。

相談員に読んでもらいたい所に線をひいていると言う。いろんな判断を兄に任せられるようになったと母は言う。実姉が妹（兄の母）は最近変化してきたというという。妹（兄の母）が実母のことを実姉に任せられるようになってきたので、実姉は喜んでいる。

- ▲兄が母に、兄の件で学校へ行くように頼んだり、指示をしたりする。

- 母は今までの生活の反省をするようになってきたという。無理な節約や逃げとしての趣味をしてきたのではないかと思うことがあるという。

- ▲兄は学校へ行かない。県外高校進学決める。中間、期末テストは、自宅受験した。3分の2くらいできたという。女の子から兄に長電話（2時間）がかかるようになったという。兄は電話を切りたけれど切れないようだと言っている。電話の後、兄が、自分が利用されているのではないかと言いついたという。カップ麺、外食が多くなった。時々母の作ったものを喜んで食べる。最近、母が自分のために頑張ってくれていると塾の先生に伝えたことを、母は先生から聞いたという。兄が、自分の将来について、母に援助を求めるようになったという。

- 夫が妻のことを、お母さんと呼ぶようになったという。

- 最近母は夫のそばにいても、気分が軽くなったという。

■会社を辞めるころから7年間ぐらい、父（夫）は荒れていたという。今、落ち着いているという。

（助言）

・今のまま、見守っていきましょうと告げる。

<十回目>

●母は息子の女友達が訪ねてくると世話をしているという。母が息子に家の用事を依頼することができるようになったという。家の用事をしてくれるのでペイを払うことにした。その相談から兄が父の仕事の評価をするという。

▲兄は進学校へ体験入学に行ってきた。前日に兄は荒れたという。しかし数日後、荒れた原因を言葉にして母に説明することができたという。母を外出させて兄がその間に自分の部屋を掃除したという。掃除のあと、“いくらくれる？”と言う。母が“1,000円”というと兄は“2,000円くれる？”と要求する。2,000円あげるとゲームを買って来たという。長電話してくる女の子のことを、はっきり、きれいと言えるようになったという。兄が経済的な考え方をするようになってきたと母はいう。

（助言）

・今のまま見守っていきましょうと告げる。

<十一回目>

●母は自分が変になったと言う。実母が亡くなり、自分にとって帰れる実家がなくなったからだと思うという。社会の中で残りの人生を役にたてたらと思うようになっていくという。夫の遊びにつられて自分も遊びようとするが遊びのレパートリーがないことに気づいた。母は心がふさぐので病院で薬を貰ったという。自分が幼稚であると認められるようになったという。子育て中自分は禁欲してきたという。それは自分にはきびしかったと思うという。同窓会に出て、友人の話を聞いて、会社員の良さとつらさが解ったという。

▲兄が夫婦けんかの仲裁に入るようになったと母はいう。兄が母にもっと怠けてと言ってくれるという。兄は父よりパソコンの学習が速いという。

■父が夜ガールフレンドと遊ぶようになったと母がいう。父が息子にお母さんは子どもだから、そのつもりでつきあうようにと忠告したと母がいう。家でコンピューターを買う。兄が使うと、父が取り上げる。父が使った後で、兄が使うようになったという。

父が不登校の講演を聞きに行った。

（助言）

・今のまま見守っていきましょうと告げる。

<十二回目>

●母は北陸旅行に出かける。徒歩で歩きまわったら、気分が楽になったという。

不登校の原因は母1人のせいではなく、家族成員3人のせいだったと思うようになったという。皆が自然に戻ってきたと母がいう。父の失業中、母は兄にいろいろと指図をしてきたことを振り返る。母は日記をつけているうちにこの1年間のことを思い出したという。

▲兄は、母が旅行から帰ったら、風邪で寝込んでいたという。父に頼らずに自転車の修理をしたと兄が母に報告したという。

●母は“もし、壊れたら、また、なおしてね。”と兄に頼んだという。

■父は父方家系図を出してくる。

(助言)

- ・自分を大切に、かつ相手も大切にするといい、対人関係の言葉を兄が使えるようになったことを評価しようと伝える。
- ・兄が父を乗り越え、父と息子が友人関係になってきたことを伝える。

<十三回目>

●母も兄も登校に対して意識を持たなくなっていることに気づいた。母は、農業をやりたいと思うという。

▲兄は登校した日は塾を休むようになった。リラックスして登校できるようになった。緊張しないで登校する。忘れ物をしても途中で買うからという感じである。兄は友人を選ぶようになった。健全なグループと付き合うようになった。

不健全なグループと友人が付き合っていることには、兄から、忠告などはないという。学校のテストは母がもらいにいって兄が家でやった。3分の2くらいできたという。

(助言)

- ・今のまま見守っていきましょうと伝える。

<十四回目>

▲兄が母を応援するようになった。お母さんは自分の好きなことをやるようにとってくれるという。兄は、不健全なことをしている友人に恐喝を誘われても断れるようになった。

●母は、なぜ恐喝がよくないかを説明する。相手のことを考えてみようと言ったという。

▲兄は納得したという。兄が不登校を肯定的に認めて言語化するようになってきたという。

“休んでよかった。不登校の子と僕とは同じだった。今まで違うと思っていたけど、同じだった。休まなかったら自分が切れていただろう。”と兄が言ったという。

■父(夫)は元気が無くなってきたように思うと母はいう。「まあいいや」で父は今までやってきた。しかし何か変わってきた。どこか、生き生きしていると思える。時々父(夫)が母には可哀相に見える時があるという。

●母は父に“仲良くしようね”と、思っていなくても、言えるようになったという。

(助言)

- ・非行と逃避はコインの裏表のようなものであると説明する。
- ・適応のための逃避であることが言語化できて兄が自信を持てたことを説明する。

<十五回目>

●母はガラス細工の個展を見に出かけたという。ガラス店は実家の商売だったという。

母が不登校の専門家に会いに行ったという。不登校を過去に持つ人が素敵な人だったので、感心したと母はいう。担任の先生が、“お母さん、強くなりましたね。”と言ってくれたと母はいう。父、母、兄、三人で家族旅行をしたという。

▲兄が父の落ち着きの無さを批判したという。“夫婦と思わず、同居人と思えばいいよ。”と兄が母に忠告してくれるという。

■父は「企業のために働いてきた。退職後、何のために生きるのかという目的を見失ったと

いう。自分が辞めたら、自分の代わりをできる人はいないと思っていたら、代わりの人がいてショックだった」と家族に言ったという。

(助言)

- ・母自身が社会的に行動していくことで、母子分離が可能になったと説明した。
- ・子どもが成長したことで、子育て共同体も解体してきたことを伝える。
- ・父、母、子どもといった固定した役割から、対等な個人として、3人が互いに助け合い、補い合う関係がもてる家族へと変化してきたことを伝える。

<十六回目>

- 母は自分が勉強をしなくなったと言う。母は、自分で働きたいとも言う。

実家から相続したお金で新築の家を建て、子どもの学資に注ぎ込むことを承諾したと報告してくれた。

- ▲兄は県外高校普通課程に合格した。

地元の友人は良い友人だが、不登校のことをひきずるから地元の高校進学はやめたと兄が言うと母が報告してくれる。兄が「今度の学校は不登校の悩みを話せるからいい」と言う。寮生活で僕がいなくて父母はどうなるだろうと兄が心配すると母はいう。

- 父の実家の敷地に家を建て、夫婦で父の実父の世話をすることになったと母が報告してくれる。今まで同居していた父の弟が遠くに越すことになったという。

(助言)

- ・父は長男としての役割をとることができるようになったと説明する。
- ・先に生まれた先占権のある長男が下の兄弟につくしてあげる度量の大きさを持っていると説明する。
- ・母にはこれから先の自分の生き方を考えてみよう伝える。

IV 考察とまとめ

16回の面接のなかで母親の報告を相談員が解釈して返すことによって兄、母、家族それぞれに発達が生じたと思われる。助言という型で行われた、このような「解釈」の伝達は母親の現実認識力を改善した可能性がある。ただ、どのような母親にも効果的であるとは言えない。母親のもつ言語能力だけでなく、家族の文化的背景に相談員がどのくらい接近できるかということも関係してくる。今回そういう意味でうまくいったケースである。

<兄の発達>

(1) 母子分離の完成

日常生活や友人との付き合い、進路などについて、兄は自分で判断し、決定できるようになった。

(2) 父子関係の発展

兄は同性の父と進んで関わるようになった。

父を批判して自分の上位を主張する一方、父をたてて父を尊敬していこうという姿勢がみられるようになった。

<母の発達>

(1) 自明性の展開

個人をとりまく背景として比較的明確である事実について意識化できるようになった。

- ①客観的事実の記録としての家系図の確認をする。親としてまず、自からの出自を問い、次に受け継ぐ子孫を形成し、文化や財産を伝え渡し、どのように老いていくのかといった認識をもつことができるようになってきた。
- ②心理的印象の記録としての自分史の作成をし始めた。これは、年齢という時間軸上に思春期、家族関係（自身の母子関係や父子関係、兄弟関係など）、結婚、出産、子育てといった項目に沿って、自己の主観的な印象をふりかえって記録していく作業である。
- ③事実（原因）と印象や判断（結果）の因果的認識がノート法を実践することで自発的に発生した。ノート法については図1を参考にして欲しい。家系図作成、自分史作成、ノート法実践によって、徐々に因果的認識が出てきた。母自身のねじれ（自分を抑えて他者に従うことで平静を保つことなど）にも気がつくようになる。ねじれの修正（すなわち自分の気持ちを表現する）も自らの力でできてくる。今回母親に自発的な変化、発達が見られたことは、家族のもつ自律的システムをも変更するチャンスとなったようである。

(2) 行動主体の育成

発達を促す主体が育成された。母が基礎体温を測定することにより、自身の高温期の活動性、攻撃性を善として受け入れることができた。それが子育てに必要なものであることを理解することができた。そしてその攻撃性を、子どもに対して遠慮なく表現することができた。一方子どもは母の自然な攻撃性を愛情として受け取ることができたようである。また、母の活動性と試行錯誤的な生活を見ることで、子どもも失敗を恐れることなく、なんでもやってみようと動機づけられたようである。子どもが母から離れていく時、同様に夫婦の心理的分離も始まる。専業主婦として経済的に夫に依存していたため、精神的に不安定になるが、社会的活動に取り組むことで乗り越えていったと思われる。夫婦としての子育て共同体が解体され、つぎに父が同性の先輩として男の子を職業的世界へ導くプロセスが展開してきたようである。父自身も母と同様、自分自身について、息子に語り始めるのであった。

<家族の発達>

(1) 生殖家族の終焉

子育てを目的とする家族が、子どもの成長によって質が異なる家族へと変化をとげた。

(2) 意識の中の家族の発生

一緒に住むことを家族の条件であるとする「居住の共同」や、血のつながりこそが家族であるとする「血縁の共同」から、家族構成員の意識の中に価値観を共有しようとする家族（上野千鶴子、1991）へと向かい始めたことが伺われる。

さて、16回（1年4ヶ月）の面接期間中に、不登校は完全には克服できなかったが、家族のそれぞれが新しい旅立ちをすることができた。家族構成員の一人一人の発達としては、健全だと思われるが、旧来の文化を規範としている世間の中で生活するには、各自が行動調整していく必要があり、それには今しばらく時間が必要だろうと思われる。

日付、曜日、天気、母親の体調
朝食（時間）
昼食
間食
夕食
子どもの様子

図1 ノート法：書式例（岡村、2003）

（注1）母親の体調とは基礎体温とその日の気分など。

（注2）各食事はメニュー、量を書き、さらに、喜んで食べた場合◎、ふつうなら○、勧められていやいや食べた場合△、食べない場合は×を記入する。

引用・参考文献

- 鴨澤あかね（2003） 不登校児の母親面接. 心理臨床学研究 VOL.21 No.2 p.125-136
- 上野千鶴子（1994） ファミリー・アイデンティティのゆくえ 近代家族の成立と終焉 岩波書店 p.3-42
- 岡村佳子（2003） 食行動にみられる母子関係の変化について 日本教育心理学会第45回発表論文集 p.232

<付記>

この事例研究は1999年6月25日におこなわれた発達心理学会の分科会である、発達基礎科学研究会で発表したものに加筆修正を加えたものである。発表を了解してくれた母親と、研究会でコメントしてくれた方々に感謝する。